

<巻頭言>



年頭のご挨拶

杉山 弘 泰*

令和3年の年頭にあたり、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。皆様方におかれましては、健やかに新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

さて年頭にあたり国際大ダム会議「ダムの安全性に関する国際宣言」(2019年10月)のご紹介をしたいと思います。この国際宣言はダムを取りまく種々の状況の変化を確認し、ダムの安全性を支配する10項を示したもので、21世紀初頭の現代におけるダムの位置づけを明らかにしたものと考える事ができます。国際大ダム会議ではこの宣言を各国のダム建設・運用に関わる全ての組織に周知するように求め、日本大ダム会議では会誌「大ダム」2020年4月号に掲載しました。

この宣言では、ダムを取りまく状況の変化として設備の経年劣化、従事者の経験不足、経験者の引退、民間セクターの関与の増加、気候変動、より困難なサイトでの開発、統治機構の変化を挙げ、こうした状況変化に対応してダムの安全性を支配するべき10項目として①ダムは構造として完璧である事、②日常の保守点検が重要である事、③モニタリング計画が重要である事、④緊急時計画が重要である事、⑤適切な訓練が必要である事、⑥教訓の共有が必要である事、⑦流域の総合的な管理が必要である事、⑧ダム所有者は最終的な責任を有している事、⑨河川管理者等監督機関の役割が重要である事、⑩国際的な情報共有が有効である事を提示しています。これらは本会諸賢には十分にご承知であることとは思いますが、是非「大ダム」誌バックナンバーをご再読いただけると幸いです。気候変動が本格的に影響を及ぼし始めている今日、ダムへの期待、再エネとしての水力発電への期待など大変に大きくなってきています。この安全宣言の考え方を実務に反映してゆく事が望まれるところであると思います。

さて、昨年は世界中がコロナウイルスに振り回された一年となりました。

日本大ダム会議でも従来通りの事業を進めることはできず、7月の理事会は電磁的方法により行われました。会誌「大ダム」は編集委員会の尽力により従来通り発行されましたが、技術委員会の各分科会ではウェブ開催とされたものも有り、恒例のダム施設見学会の実施は見送られました。会員諸賢にはご苦勞、ご不便をおかけいたしました。

さいわいダム・堰施設技術協会との共催による第53回ダム技術講演討論会は11月24日に日本ダム協会主催第79回ダム施工技術講習会との合同で、ウェブ併用により従来に近い形で会場70名、ウェブ90名の参加者を得て開催することができました。午前中は柳川城二前日本大ダム会議会長・技術委員会ダム設計基準調査分科会委員長および

* 一般社団法人 日本大ダム会議 会長

4名のワーキンググループ長からのダム設計基準調査報告と活発な質疑、討論が行われ、午後は清水則一山口大学教授による人工衛星によるダム貯水池の監視技術の展望についての特別講演と活発な質疑が行われました。残念なことに質疑は会場参加者だけからで、ウェブ参加者からの質疑があればさらによかったと思います。

このウェブ併用の講演討論会は、その準備、手配、当日のコントロールなど全てが事務局自前で行われました。先行してウェブ開催を行った学会からの情報収集をはじめ、機器の調達、ウェビナー提供会社との交渉、開会前日の長時間の準備などを経て大きなトラブルなく講演討論会を開催できたことについて、事務局の努力に敬意を表したいと思います。また今後のウェブ併用開催を自家薬籠中のものにできたことは大きな成果でした。

国際会議もコロナウイルスに振り回されました。

2020年の国際大ダム会議年次例会は4月にインド・ニューデリーで開催の予定でしたが、9月、12月と2度にわたり延期し結局開催されず、また9月に予定されていた日中韓の東アジア地域ダム会議(EADC)も韓国大田での開催が一年延期とされました。

年次例会における国際大ダム会議総会は11月30日にウェブ会議で開催され、新加盟国(モンゴル、キルギス、ラオス、参加国は合計104か国)、新副総裁(欧州地区代表 仏、米州地区代表 ブラジル)、21年度予算および今後の例会/大会の予定等の議事が承認されました。ちなみに今後の例会/大会の予定は21年6月マルセイユ(仏、例会/27回大会)、22年6月ヨーテボリ(スウェーデン、例会)、23年4月ニューデリー(印、例会)、24年成都(中国、例会/28回大会)、25年シラズ(イラン、例会)となっています。また「ダムの安全性に関する国際宣言」に関連する事例として特別に日本からハツ場ダムの事例についてプレゼンテーションを行いました。

翌12月1日はアジア太平洋地域会議(APG)がウェブ会議で開催され、アジア11か国から「ダム、気候変動と極端事象」をテーマに活動報告が行われました。日本からは国際分科会濱口達男委員長より「日本における災害管理とダム」が報告されました。こうした国際会議の実施の準備にあたっては国際大ダム会議事務局との連絡調整に日本大ダム会議事務局は極めてタイムリーに対応してもらっています。

ウェブ会議はグリニッジ標準時で行われ、日本では11月30日20時~24時(日本時間)、12月1日15時~18時(同)となり主要幹部が日本大ダム会議事務局本部に集まり参加しました。ウェブ国際会議は移動の手間や時間、費用がゼロで極めて効率的であり、今後こうした会議はより積極的に使われてゆくでしょう。意外に感じたのはかえって相手が近くに感じるという事です。大規模な講堂等でのプレゼンテーションと違い、各自が自分のパソコンで見ているために、個人とのつながりはより近く感じるようです。これはウェブ会議の特徴の一つとして認識しておいて良いことかもしれません。しかし当然の事ながら、外国へ出向き彼の国の人達と会い話すことで相手を知り、異国の匂いをかぎ、文化・歴史を知る事には、より大きな価値があるということも改めて感得もしました。新しいシステムと古い方法、それぞれの長所をうまく融合させながら21世紀は進んでゆくのだと思います。

2021年は良い年でありますよう祈念しております。